富士道

モデルコース①
富士の麓の小さな城下町：谷村コース

郡内織の江戸流通の拠点として栄えた“富士の麓の小さな城下町”、時折姿を見せる富士の姿からいよいよ山元にたどり着いたことを知る

郡内の中心である谷村には、江戸時代になると谷村藩が置かれました。江戸時代初期に谷村藩主となった秋元氏が城下町の整備を行い、現在も谷村の城下町には当時の町割りが残っています。

谷村城下では、田原の滝の上部から引き込んだ桂川の水を流して、農業用水や飲用水、織物生産など様々な用途に利用していました。現在も家中川（解説参照）が町中を流れています。

絹織物生産が盛んな上州総社（現在の群馬県前橋市）からやって来た秋元氏が、家臣の内職として絹織物生産を行ったことも、郡内織の発展に関係しているのではと考えられています。

谷村には江戸の大店の支店が置かれるなど、郡内織の流通拠点として栄えました。谷村を代表する祭礼・八朔祭で使われる豪華な屋台は、数軒の谷村の絹問屋がお金を出し合って造ったものです。郡内織の流通拠点として繁栄していた谷村の様子がうかがえます。

富士道は、現在の国道139号と重なって谷村の町中を通っています。

コース概要

S G 谷村町駅
距離：約3km
所要時間：約3時間
道路状況：基本的に舗装路
高低差：約20m
※勝山城跡はミニハイキング（未舗装路、標高差100m程度、+1時間程度）

ミュージアム都留

郡内織の歴史や、谷村に滞在した松尾芭蕉に関する内容を展示。また、八朔祭で曳かれる豪華な屋台と、葛飾北斎をはじめ江戸で人気の浮世絵師が下絵を手がけたとされる飾幕が常設展示されています。谷村のまちあるきはここからスタート。

都留市商家資料館（旧仁科家住宅）

大正時代の中期に建てられた商家造りの絹問屋。通りに面した玄関の間は、織物の検品や積み荷作業のために使われました。和洋折衷の建築は当時は大変珍しく、絹の取引先が海外まで及んでいたことを物語っています。館内では、郡内織の反物や郡内織を裏地に使った羽織、絹織物の取引に関わる資料など、郡内織の歴史を伝える資料を展示しています。

都留市八朔祭屋台展示庫

毎年9月1日に生出神社の秋の例祭として開かれる八朔祭は都留市最大の祭り。豪華絢爛な飾幕が掛けられた屋台が曳き出され、十万石格式の大名行列が練り歩きます。4台の屋台が復元されており、うち3台はガラス張りの屋台展示庫に保管されて外から見学ができ、1台はミュージアム都留に展示されています。

円通院

秋元時代の文化財が多く残る寺院です。境内にある石橋はかつて家中川に架けられていた橋の一つ。梵鐘は日光東照宮にある徳川家康の墓所の鋳造も手掛けた、有名な鋳物師によって鋳造されたものです。

寺町通り

国道139号を1本山側へ入った古道は寺町通りと呼ばれ、西凉寺、専念寺、東漸寺などが並んでいます。東漸寺や専念寺の裏山に登ると、真正面に富士山を、眼下に都留市の街並みを広く見晴らせ、谷村のまちづくりは富士山を基軸に行われたことがわかります。

家中川/元気くん1～3号

家中川は、江戸時代に城下に張り巡らされた用水路網。飲用水や灌漑用のほか、のちに織機も動かした水車の動力、染物の染料を洗う水となって織物産業の発展を支え、常に人々の暮らしと共にありました。現在は、小水力発電所「元気くん」1号～3号が稼働しています。

勝山城跡／谷村城跡

勝山城は要塞として城山の山頂に築かれた山城で、一時期、お茶壷道中で運ばれた茶葉の保存場所としても利用されていました。都留市内・富士山を見渡す展望地です。城山の下に位置する現在の小学校付近には、藩主の執務や日常の生活の場として使われた谷村城がありました。